

後発資本主義国 日本

—日本をめぐる言説にみる構造とその変容(前篇)

大臣官房総合政策課 企画室長 廣光 俊昭

アポロンは… ある博識な僧侶によって、魔法を善くするむかしの異教の神であると見破られ、教会の裁きにゆだねられてしまった。拷問のあげく、彼は自分がアポロン神であることを告白した。処刑の寸前になって彼は、最後にもう一度ツイッターの楽をひき歌をうたうことを許してもらいたいと願いでた。ところがそのツイッターの楽の音はひとの心を強くうち、その歌は魅力にあふれるものだったので… 女たちは皆泣いてしまった。

(ハインリヒ・ハイネ『流刑の神々』)

1. 上海万博私記

筆者は、上海万博(2010年5月1日～10月31日)への出展の責任者をつとめる機会に恵まれた。富山県では、5月8～9日の二日間、日本館イベントステージにおいて「富山県の日」を開催し、当時、筆者は財務省から富山県庁に出向中の身であった。当日は、富山県の豊かで美しい自然、多彩な歴史・文化、産業、食の魅力をまるごと体感できる映像やパフォーマンス、展示などを通じて、県の魅力をアピールした。会場には2日間で約14,000人が訪れ、両日の万博全体の来場者(約348,500人)の4%強の方々に展示をみていただいた計算になる。会場入り口にできた長蛇の列をみて、胸を撫で下ろすことができた。

展示の企画の際、筆者が心を用いたのは、なによりも県の「雑種の」な魅力を伝えることにあった。県在職中は観光を担当した時期もあったが、国内向けの観光PRでは、立山連峰などの風光明媚な自然、おわら・むぎやをはじめとする伝統芸能な

どに重点をおくことが多かった。しかしながら、外国に向けて富山県の魅力を訴える万博の機会では、自然や伝統芸能にとどまらず、県ゆかりの漫画・アニメを含むポップカルチャーや先端技術を擁する産業活動を組み合わせ、雑種的な魅力を打ち出すべきと考えた。富山県は『ドラえもん』の藤子・F・不二雄、『忍者ハットリ君』の藤子不二雄[Ⓐ]の出身地である。地元の制作会社によるテレビアニメ『true tears』が全国的反響を逆輸入する形で話題となり、県知事までもが番組を見たと言明する事態となっていた。『true tears』は地理的に富山製であるにとどまらず、その表現のあり方においても、様々な文化の魅力的な合成物である(コラム参照)。こうした県ゆかりのポップカルチャーに加え、先端技術・産業の分野からは、人工知能を備え、世界の介護施設への導入が進むアザラシ型ロボット「パロ」、県発祥のYKKの高機能ファスナーなどが、四季折々の立山連峰の表情をとらえた大画面、伝統芸能の舞台上の実演と交錯しながら、県の魅力を展開していった(図1、2)。

観客は展示の雑種の喧騒を楽しんでくれたようにみえた。おわら・むぎやの舞台前には人垣ができ、ドラえもんなどキャラクターとの記念撮影をする親子が後を絶たず、「パロ」の愛くるしい仕草に人々は見入っていた。近代化の渦に巻き込まれつつある中国をはじめ新興国の人々が、1世紀半に及ぶ近代化の果てに残った我々の姿を、希望への道標とみたか、頹落した古代神の姿とみたか、筆者にはわからない。ただ、万博への出展を契機に再認識したことは、日本は雑種であるこ



図1 むぎや(『true tears』に「むぎは」として登場)



図2 ドラえもんとの記念撮影

とに、その実存までも賭けているという感慨であった。雑種であることが実存と結び付けられるのは、実は我が国の歴史では繰り返し観察されてきた光景である。しかしながら、同時に、どこか過去とは異なり、暗く重たいものに付きまわられてきた雑種性が、軽くて明るい「ハイブリッド」とでも言うべきものに変容しているとの感触を抱いたのも事実である。様々な来歴を持つ文化的産物が、狭い会場で競い合いつつも楽しげな調和のもとにあったのである。

筆者が力を入れた「富山県の日」会場の脇にある日本館の本体では、先端技術を活用し高齢化や環境問題に立ち向かう、日本の近未来の姿が展示されていた*1)。トヨタ自動車が出展した介護・家事支援ロボットは見事にヴァイオリンを披露したし、1人乗りの乗り物「i-REAL」が人のスマートな移動を実現するのを見た。世界の隅々では、クールジャパンなるキャッチコピーのもとに、日本のポップカルチャーが国家的に推進されている。先端技術とポップカルチャーは、困難な問題を抱え顔落しつつあるようにもみえる日本という国が、世界史という普遍の場に、その存在意義を刻みつけようとする最も新しい企てである。本稿の第一の目標は、我が国の1世紀半の近代化の道

程で、繰り返し目撃されてきた思考のひとつの型—一言説の構造—を取り出すことである。その上で、第二の目標として、雑種性が「ハイブリッド」として受け止められる事態を解明すること、即ち、21世紀初頭において、その言説構造に生じつつある変容を明らかにすることを目指す。

2. 後発資本主義国における逸脱と挑戦

(1) 「逸脱」あるいは「雑種化」

米国の経済学者ガーシェンクロン*2) (1904—78年) は、産業革命の発祥地である英国を先頭に、フランスを経て、ドイツ、ロシアなど後発国につづく工業化を通観し、後発国の工業化は未熟な条件の下で先進国からの圧力に晒されつつ追求されざるをえない結果、標準モデルたる英国からの「逸脱」(deviation)を伴うと論じた。具体的には、1) ある国が後進的であるほど、産業に対する資本供給、企業への指導を与えるべく企画された特殊な制度の果たす役割が大となり、後進的であるにつれ、こうした制度が強制的・包括的になると指摘した。表1は、先進地域で自生的に成し遂げられた工業化が、後進地域ではクレディ・モビリエ(仏)等の銀行、さらには国家そのもの

* 1) 筆者は日本館のほかに、中国国家館、上海館、遼寧館、広東館を参観する機会を得た。地方政府の館では、未来へと発展する省・市の姿を打ち出すのに忙しい印象であったが、国家館では国宝クラスの絵画『清明上河図』の動きを伴う電子版や、環境未来都市のモデルを提示するなど、中国として雑種性の問題と格闘する姿があった。

* 2) 以下は『後発工業国の経済史』(1962、1968年)による。

表1 発展段階に応じた工業化の担い手

段階	先進地域	相対的な後進地域	極端な後進地域
I	工場	銀行	国家
II		工場	銀行
III			工場

(ガーシェンクロンによる)

の指導のもとに遂行されなければならなかったことを表している。また、ガーシェンクロンは、2)ある国が後進的であるほど、工業化の過程で農業の果たす役割が小さくなり、その結果、工業に十分な国内市場を提供することができなくなると論じた。国内市場基盤の脆弱さは、海外市場獲得へと目を向けさせることになる。ガーシェンクロンは我が国の史壇に強力な伴走者を見出すことができる。大塚久雄(1907-96年)の確立した西欧史学*3)は、英国において、小生産者の主導する「局部的市場圏」の成立を嚆矢に、自生的に資本主義が生長していく姿を描く一方、フランス絶対王政と結びついた特権マニュファクチュールと大革命によるその顛倒を経由しつつ、ドイツにおける不徹底なブルジョア革命とユンカーによる封建的土地所有、関税同盟による市場の創出、特権企業による重工業化の開始といった具合に、次第に英国から「逸脱」し、畸形的な雑種へと変じていく後発資本主義国の姿を見出している。

こうした「逸脱」は苦痛を伴うものとして描き出された。英国における資本主義化は、農村工業の担い手たる一部農民の社会的地位の向上を伴うものとして、明るい色調で描かれた。他方、フランスは英国に比し激烈な革命を経験することを余儀なくされ、ドイツ、ロシアに至っては、先進国からの側圧に抗して工業化を実現するため、古い

政治経済体制を生かした強制的な資本蓄積が追求されねばならなかった。苦痛は文化・思想にも及んだ。後発国における停滞を打破するためには、英国では要しなかった興奮剤、工業化への熱狂が必要であり、ガーシェンクロンは、フランスのサン・シモン主義、ドイツのリストの工業化論がこうした薬の役割を果たしたという。工業化の噪的追求は旧い生活様式を破壊し、文化を雑多で捻じれたものに変えていく。ドイツ・ロマン派は、元来、工業化の圧力を意識したものではなかった。フランスの政治・文化支配への対抗として開始されたものであるが、失われつつある自然的調和、ゲルマン神話への遡及という主題を深めるなかで、ナショナリズムの揺籃となるとともに、工業化に抗する自然主義・神秘主義の砦としての色合いを濃くしていく*4)。

(2) 「挑戦」あるいは「普遍への跳躍」

しかしながら、「逸脱」は苦痛を伴うにも関わらず、むしろ苦痛を伴うが故に後発国に挑戦のチャンスを与えた。後発国は海外からの技術移転を通じ、発展に要する幾つかの段階を省略することができた。ドイツは希少な資本を特権企業に集中することを通じ、重工業化において英国を凌駕する勢いを示しはじめた。「持たざる国」として後発資本主義国が、英国を中心とした金本位制・自由貿易を基軸とする19世紀システムへの挑戦を開始する。

文化・思想の面でも挑戦がはじめられる。『ドイツ古典哲学の本質』(1834年)においてハイネは、ドイツでは政治革命こそ実現していないが、宗教改革(ルター)につづいて、哲学を完成したとする。哲学の完成は、カント、フィヒテを

* 3) 以下は『西洋経済史』(1977年)による。

* 4) ドイツ・ロマン派の性格を複雑にしているのは、それが古典古代への憧れを含んだものであることにもある(冒頭のハイネからの引用を参照)。ロマン主義とは、一般に現存しないものへの憧憬であり、政治的には革命派にも反動にもなりうる。ドイツ・ロマン派においては、その憧憬の対象は古代ギリシャであることもあれば、ゲルマン神話であることもあった。ギリシャの青年を主人公として『ヒューペリオン』を書いたヘルダーリン、彼の学友であったヘーゲルにおいても初期のギリシャ礼賛は著しいが、次第に古典古代への憧れは後退し、ゲルマン的なもの、さらには工業化の結果失われはじめた共同体・自然への愛惜の念が優勢になる。

経て、シェリングらの自然哲学に至る。特に問題視されるのは最後に登場する自然哲学であり、哲学と政治が結びつくことで、次のような事態を呼び寄せる。

自然哲学者は自然の根源的な力とむすびつくし、古代ゲルマン民族の汎神論の魔力をよびよせることができる。……ゲルマン民族を馴らしていた護符が、つまりキリスト教の十字架がくだける日がくると、またもや古代の戦士のおたけびが、北ヨーロッパの詩人が歌ったり語ったりしている狂戦士ベルゼルカーの気ちがいじみた怒りの声がさわがしく響きはじめる。……そしてついにゲルマン民族の嵐の神トールが大きな槌をもってとび出してきて、ゴシック式の大聖堂をうちくだくだろう。 (『ドイツ古典哲学の本質』)

後の世紀になって、二度の大戦を予告したものと評されるくだりである。ここにひとつの言説の構造が姿をあらわす。急速な近代化・資本主義化のもとにある後発国は、経済・社会から文化・思想まで自らを全面的に雑種化させ、脆弱性を抱え込むとともに、むしろ脆弱であるが故に挑戦を試みる。「逸脱」し、雑種と変じた、畸型的で捻じれたものが、そのまま世界史の普遍と結びつこうとする。近代の抱える矛盾を超克すると喧伝し一息にスターダムへ駆けあがろうとする。まるで暗闇のなかで跳躍するかのように、周囲が眉をひそめるのを顧みず、雑種が普遍へと跳躍するのである。

3. 日本における普遍への跳躍 (1) —経済・社会—

(1) 講座派のみた日本資本主義

以下、日本近代史に即して、普遍への跳躍に向かう言説の構造を取り出していく。日本資本主義論争とは、1920年代後半から30年代におけるマルクス主義陣営内の論争であり、明治維新の歴史的位置付け、日本資本主義の性格をめぐる議

論がたたかわされた。論争は陣営の戦術論と密接に絡み、明治維新をブルジョア革命と規定し、社会主義革命へと一挙に進むべきと主張する一段階革命論(労農派)と、維新を不徹底な革命とみなし、当面の焦点を封建的残存物に対する闘争と考える二段階革命論(講座派)の間で争われた。

本稿の関心は戦術の評価にはない。日本資本主義の理解において独自の深みに達し、後世へ大きな影響力を持った*5) 講座派の日本理解である。講座派の論客であった野呂栄太郎*6) (1900-34年)は、維新が不徹底なブルジョア革命に終わった理由として、急速な産業革命のため政府の保護政策が必要とされたことや、「世界資本主義の自由主義より帝国主義への転向」と国内無産階級の台頭に対応するため、地主と商工資本家の間で妥協が成立したことをあげている。いずれにせよ、結果的に農業における封建的生産様式が十分に揚棄されなかったことで、農民は「資本主義と半封建的土地制度との二重の搾取の下に」おかれ、窮乏化した。これに伴い、国内市場が狭隘なものにとどまり、日本資本主義は異常に初期段階から対外侵略性を持つことになったという。山田盛太郎*7) (1897-1980年)も同様に、「日本における比類なき高さの半隷農的の小作料とインド以下の低い半隷奴的労働賃金」との相互規定関係が、日本資本主義の発展の絶対条件であったと論じた。高小作料が低賃金で働くことを止むを得ないものとし、低賃金が高小作料での耕作を受け入れさせ、小作人・労働者からの強度の搾取を可能としたというのである。

こうして無理を重ね、封建制と資本制の雑種として立ち上がった日本資本主義であったが、図3にみるように、総体的にみて日本は遅れた農業国のままであった。山田は、軽工業、重工業とも「先進国における日本におけるとの間の距離は自明である」と宣告した。低賃金故に「自分の発明し

*5) 例えば、先述した大塚久雄である。

*6) 以下は『日本資本主義発達史』(1930)による。

*7) 以下は『日本資本主義分析』(1934)による。

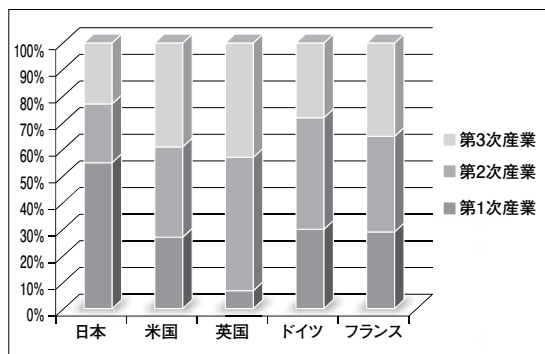


図3 産業構造の国際比較 (1920年)
 ※過半を占める第1次産業人口は、日本が依然遅れた農業国であったことを示している。

た自動繰糸器械を使ってみたいが、日本の製糸業は工業として50年以上遅れている」との報道を取り上げ、本格的な機械化による生産性向上の前で立ちすくむ、製糸業の姿を摘出した。重工業は兵器生産と密接な関連をもつが故に、軽工業以上に政治的必要に基づいた産業創出が遂行された(表2)。しかしながら、「当時世界最大戦艦薩摩」の建造など一点豪華主義的な成果はあるものの、「その昇陸にもかかわらず、日本の製鉄業の規模の狭小さ」は明らかであると切って捨ててしまう

(表3)。重工業の力不足は軍の機械化までも遅らせた。「(軍において) 密集化の用法が行われ、夜間操作に重きが置かれているのは、仮想対象の顧慮にも依拠する所であるとはいえ、機械化の低位の然らしむる所にある」との指摘は、のちの対米戦の帰趨を知る我々の耳には、予言的な響きをもって聞こえる。

(2) 死への跳躍、バブルへの跳躍

講座派の人々にとっては、日本資本主義がどれほど脆弱な基盤しか持たず、展望に乏しいものであっても、それは彼らの目指す社会主義革命にとって好都合な事態であった。野呂は、日本資本主義を「資本主義的世界体制の最も弱き一環」と呼び、その畸型性・雑種性(資本主義と封建的土地所有の併存)は、ロシアにつづき世界に先駆けた革命へと転化することで、世界史的普遍へと媒介されるはずのものであった。

しかしながら、マルキストではない多数の者にとっては、普遍に至る別の道が必要であった。1929年来の世界大恐慌により、貿易は縮小し、世界は幾つかのブロックに分割されていった。こ

表2 軍関係工廠の生産の増大 (山田『日本資本主義分析』より転載)

	日清戦争直前 (1893年)	日露戦争直前 (1906年)	増加率
総民営工場の職工数 (人)	285,478	612,177	114%
軍器工廠の職工数 (人)	9,584	89,286	831%
陸軍工廠の職工数 (人)	3,832	38,629	908%
軍器工廠の原動力数 (馬力)	2,084	80,728	3,773%
陸軍工廠の原動力数 (馬力)	954	48,072	4,938%

※山田は「軍事の、生産に対する優位」を説明するために本表を使用している。軍関係のウェイトの急拡大が読み取れる。ただし、生産の大きなウェイトを占めているのは、1906年においても依然民営工場であったことにも留意。

表3 鉄鋼業の国際比較

	年	日本	米国	英国	ドイツ	フランス
粗鋼生産量 (百万トン)	1912/13	0.4	31.8	7.3	18.1	4.6
	1927/28	3.6	49.0	8.9	15.3	8.9
	1937/38	6.1	40.0	11.9	21.2	7.1

(三和良一『日本経済史』(1989年)による)

※20年代後半にあっても日本の鉄鋼業は主要国中でもっとも貧弱なままであった。30年代後半になると英仏の鉄鋼業に迫りつつあるが、米国との格差は非常に大きなままであった。

うした事態は、大陸での権益拡張の動きを促す一方、希少になった資源をより有効に配分する誘因を高める。今日では戦時体制のなかから、戦後、日本的経済システムと呼ばれるようになった一連の特質が形作られたことは、広く認識されているように見える。希少な資源を戦争遂行のために必須の重工業に集中する過程で、行政機関による統制、間接金融、従業員中心の企業・労使協調等が姿をあらわす。統制は世界的な流れではあったが、資源を持たぬ国で一層強力な統制が追求されたのは自然なことである。いずれにせよ、もとより国家・社会権力による規制という畸型的性格を持っていた日本資本主義は、その特殊性を一層強化することによって生き残りを図っていったのである。

この新しい日本の資本主義は、一度目は死に向かって、二度目はバブルに向かって跳躍した。死への跳躍とは対米戦争における敗北である。ただし、この評価は幾分酷に過ぎるかもしれない。山田の所論にみたように講座派は、日本の重工業化の展望に悲観的な見解を持っていたが、国家総動員法(1938年)等による統制を通じて重工業への転換が進んでいく(図4)。米国にはとても及ばないものの鉄鋼生産量も20年代の水準を超えていく(表3)。戦後経済を牽引した自動車・電機産業が形成されたのもこの時期である。日本資本主義は少なくとも講座派の指摘した限界は突破し、戦後のGHQによる改革をも生き延びた。

一度目の跳躍が「未完のプロジェクト」に終わったとすれば、二度目の跳躍、80年代に試みられたバブルへの跳躍とその挫折は、日本経済の良好なパフォーマンスが、文明史上の新しいパラダイムの登場を告げるものと受け止められていただけに、理念的な水準では一度目以上の打撃であった。筆者はバブル期の代表的イデオログとして、畏

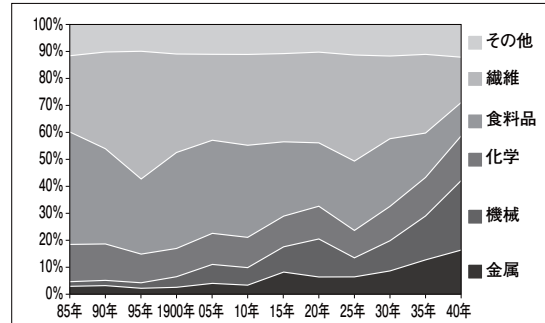


図4 日本における重工業化の進展(1895 - 1940年)(製造工業内分類)

※特に1930年代以降、急速に重工業化が進んだことが読み取れる。

敬の念を込めつつ、村上泰亮(1931-93年)の名を挙げたい。『文明としてイエ社会』(共著79年)、『新中間大衆の時代』(84年)を通じ、「久しく後進性のあらわれとみなされてきた日本の特質の再評価」という問題意識に基づきつつ、村上は「日本の特質を十分に包摂する普遍的な分析モデル」の構築を目指した。外来の産業化と土着のイエ社会が習合して創出された日本の経営が、社会にもたらす安定とダイナミズムの可能性を探った。しかしながら、遺作となった『反古典の政治経済学』(92年)の主題として村上が選んだのは、費用逓減の経済学に基づく「開発主義」の一層精緻な定式化であった。新たなパラダイムと見紛うがごときだったものが、ガーシェンクロンによる後発国のエピソードのひとつへと転落した。時あたかもバブルの崩壊が、後発利益にもはや期待できない日本において、新たな成長の道を拓く創造性が欠けていたことを明らかにしつつあった*8)。

次回につづく。本稿は筆者の現在または過去所属した団体の見解をあらわすものではなく、その責は筆者個人に帰する。

* 8) 村上自身には、日本のシステム(イエ社会)の創造性の欠如への懸念は早くから存在し、『反古典の政治経済学』への展開は、ひとつの自然な帰結だったとみられる。例えば、『文明としてのイエ社会』では、日本の未来に関し、①「適応的棲み分け」(律令制を換骨奪胎し土着化していった例の如く、土着システム優位の流れ)、②「溶解的国際化」という二つのシナリオを用意しているが、「適応的棲み分け」シナリオの難点として、『目標喪失の局面』においては、日本の企業や家業は一転して消極防御の姿勢を取る可能性がある」と指摘していた。

後発資本主義国 日本 —日本をめぐる言説にみる構造とその変容(後篇)

大臣官房総合政策課 企画室長 廣光 俊昭

人間中心な近代ヨーロッパは、超越を失つて自己否定に陥らうとしている。しかし人間は抹殺されてはならない。人間は生かされなければならない。この矛盾、それはただ無の原理によつてのみ可能であるであらう。(高坂正顕)

4. 日本における普遍への跳躍(2) —文化・思想—

(1) 日本語で思考し、文学すること

今日、我々は日本語で思考し、文学することを当たり前のこととして、これらの活動に勤しんでいる。しかしながら、日本が近代化に乗り出した際、日本語で思考・文学することは自明のことではなかった。近代の学問を導入するため、中央・地方の官庁、学校では御雇外国人といわれる外国人が高給で雇用された。明治政府が雇用した外国人の実総数は三千人前後に達した。学校では、ナウマン(地質学)、バルツ(医学)、モース(動物学)、フェノロサ(哲学)、ハーン(小泉八雲)(英文学)といった人物たちが教鞭をとり、彼らは当然のこととして、日本語ではなく西洋の言葉で教授した。明治期の学生の外国語への投資ぶりには感心させられる。漱石の『三四郎』(1908年)において、熊本からの上京の車中で三四郎が手に取るのはフランス・ベーコンの論文集であったし、ヒロイン美禰子の三四郎への謎かけの言葉も外国語(stray sheep)であった。いまどき外国語で謎かけをする女性がいるなら、お目にかかりたい。こうした言語環境を変える上で不可欠であったのは、日本語の改造であった。「概念」「哲学」「形而上学」「人民」といった言葉は、西洋の学問を日本語に翻訳していく過程で強引に造られた言葉(和製漢語)

であり、こうした言葉の捻出を通じ、日本語で思考することが可能になったのである。ハーンの後任として東京帝国大学英文科講師に採用されたのが漱石であり、『文学論』(1906年)はその講義録として世に出た。漱石がなそうとしたことは、日本語で日本人学生を相手に文学の普遍的な構造を講ずるという、野心的な試みであった。『文学論』本文はいきなり次のようにはじまる。

凡そ文学内容の形式は $(F+f)$ なることを要。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す…吾人が日常経験する印象及び観念はこれを大別して三種となすべし。(一) Fありてfなき場合即ち知的要素を存し情的要素を欠くもの、例えば吾人が有する三角形の観念の如く…(二) Fに伴ふてfを生ずる場合、例えば花、星等の観念に於ける如きもの。(三) fのみ存在して、それに相応すべきFを認め得ざる場合、所謂“fear of everything and fear of nothing”の如きもの…以上三種のうち、文学的内容たり得べきは(二)にして、即ち $(F+f)$ の形式を具ふるものとす。(傍点引用者)

以下Fとf、認識的要素と情緒的要素の相関関係から、抽象度の高い文学理論が展開されていく。

日本語で文学することもまた当然のことではなく、苦闘の産物であった。近代文学の成立には、それにふさわしい文体の創造が必要であり、言文一致運動がそれに相当する。言文一致とは、書き言葉(文)を話し言葉(言)と一致させようとすることである。日本でもかつては言と文は比較的一致していたとされているが、時代を下るに従い、

固定的な文からの言の乖離が著しいものになっていく。坪内逍遙が「言ハ魂なり文ハ形なり俗語にハ七情も皆紅粉ことごとく化粧を施さずして現るれど文にハ七情も皆紅粉を施して現われ幾分か実を失うところあり」(『小説神髓』(1885-86年))と書いたように、飾りを排した透明度の高い文体の必要性が感じられていた。運動は二葉亭『浮雲』(1887-89年)という成果、文末に「だ」体を用いたアンチヒーロー小説、を生み出す。口語文は文学の世界のほかでも次第に受け入れられる。大正時代までには新聞記事がほぼ全面的に口語化し、いわゆる「俗語革命」が貫徹する。

こうして非西洋語で本格的な学問をなし、近代文学を生産する、雑種文化が生まれた。非西洋では稀にみる珍事である。世界的にみて母語で水準の高い高等教育課程を修めることができる例は限られ、旧植民地の多くでは一定以上の高等教育は西洋の言語によりおこなわれている。文学においても、母語による文学が隆盛し、しかも高い水準が目指されている例は少ない。ノーベル文学賞は西欧中心からマイノリティー重視へと変化しつつあるとは言うものの、受賞者はナイポール(2001年受賞、トリニダード島出身のインド系英語作家)のように西洋の言語で書く者がほとんどである。そうしたなかで、ふたりの受賞者を出した日本語による文学は健闘してきたと言ってよい。

(2) 「近代の超克」

こうした達成は近代化・資本主義化のなかで、文化・思想の核である言語までも改造し、自らを雑種化するなかで獲得したものである。しかしながら、「凡そ文学内容の形式は(F+f)なることを要」と喝破してみせた漱石の文学理論は、日本の学生には理解されなかった。文化・思想上の変革は、言語というアイデンティティの中核を明け渡すのでもなく、他方、墨守するのでもない形で遂行されたが、それは「祖先の霊があるかのように背後を顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのように、徳義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く」(森鷗外1911年)ような、居心地の悪さを伴うものであった。

こうした居心地の悪さは、自らに抱え込んだ雑

種性を一段高い普遍的なものと結合させたいという考えへと人を向かわせる。御雇外国人フェノロサの教えを受けた岡倉天心は『東洋の理想』(1902年)で、「征服されたことのない民族の誇らかな自持、膨張発展を犠牲として祖先伝来の観念と本能とを守った島国的孤立などが、日本を、アジアの思想と文化を託す真の貯蔵庫たらしめた」と述べた。その上で天心は、いまや日本は貯蔵庫以上のものとなり、「この民族のふしぎな天性は、この民族をして、古いものを失うことなしに新しいものを歓迎する生ける不二元論の精神をもって、過去の諸思想のすべての面に意を留めさせている」とし、日本の地位を貯蔵庫から世界文化の高次の統一体へと一気に引き上げる。

『東洋の理想』は英語で海外に向けて書かれたものだが、その後、戦中期まで次第に勢いを増すタイプの言説の原型となった。こうした言説の集大成として企画されたのが、史上著名な「近代の超克」座談会(1942年)である。座談会は『文学界』グループ、京都学派、日本浪漫派の三派を集めておこなわれた。出席者の中には近代に関する共通認識もなく、座談会を失敗と評する向きが一般的だが、ここでは座談会自体については他に譲り、むしろ座談会には参加しなかった、京都学派の大御所西田幾多郎(1870-1945年)と日本浪漫派の指導者保田與重郎(1910-81年)についてみておきたい。

同時期の座談会「世界史的立場と日本」を含め、京都学派は活発な時局的発言をおこなったが、戦争を「思想戦」とであると鼓舞するものの、すべてが「東洋的無」のなかで解決されるがごとき曖昧さに終始した。西田は覇道を戒めてはいたものの、西田の考え自体に弟子たちと同様の契機が潜っていたことは指摘しなければならない。

日本は何千年来東海の孤島に位して、縦の世界として発達した。…主体が多く環境の否定を通さないで、自己否定的に世界となるといふ形式によつて、発展して来つたのである。…環境から主体へとして、環境的に形成せられたヨーロッパ的世界と、相反する両極に立つと考えることができる。併し世界は何処までも主体と

環境との矛盾的自己同一的に、作られたものから作るものへとして事物に於いて一となるのである。…今日我国文化の問題は、養い来たつた縦の世界性の特色を維持しつつ、之を横の世界性に拡大することになければならない。…世界として他の主体を包むことにならなければならない。(傍点引用者)(西田幾多郎『日本文化の問題』(1940年))

日本が雑種的な「貯蔵庫」を超えて普遍へと跳躍する、媒介項として「矛盾的自己同一」が呪文のごとく担ぎ出されている。

保田與重郎においては、近代や日本に対する態度はもうすこし複雑で振れたものにみえる。保田は「日本の新しい精神の混沌と未形の状態や、破壊と建設を同時に確保した自由な日本のイロニー、さらに進んではイロニーとしての日本といったものへのリアリズムが、日本浪漫派の地盤となつた」*1)と述べている。この言葉は、近代化により日本の伝統がもはや回復不可能なところまで破壊されてしまっているという認識の裏返しである。保田は伝統を賛美する言辞を弄するが、もはや還るべき伝統が存在しないことを承知している。保田の書くものには秘めた哀感の魅力がある。その思想には、官僚主導の文明開化を植民地文化と批判する民衆・土着的な性格があり、戦後そうした面から再評価されているところがある*2)が、本稿の目的からは、『日本の橋』(1938年)の冒頭を引用することが趣旨にかなうだろう。

東海道の田子浦の近くを汽車が通るとき、私は車窓からひとつの小さい石の橋を見たことがある。…いつか橋を考えているなら、その瞬間にこんな橋を思い出す、それはまことに日本の

どこにもある哀れっぽい橋であった。

(傍点引用者)

保田はローマの雄大で人工的な橋と比べ、日本の橋は哀れっぽい、そうであるが故に趣があるという。シニカルなことを言えば、日本の橋が哀れっぽいのは、日本が遅れて資本蓄積が不十分であることと無関係ではないだろう。もっとも、そうした現実的な(官僚的な)揚げ足取りは、保田の態度にイロニカルな真剣さを付け加えることしかできない。戦況の切迫につれ、遅れて貧しい日本への哀感は募りゆき、「死の美学」なる美学的袋小路(あるいは袋小路の美学)に至る。

5. 21世紀初頭の日本にみる言説構造の変容

(1) これまでの議論の整理

これまでの議論を整理しておこう。1世紀半の鳥瞰が明らかにしたのは、後進性・逸脱・雑種性の認識から、そのまま世界史的な普遍への跳躍が試みられるという、言説構造の存在であった。表1にまとめたように、こうした言説は分野をまたぎ、まるで日本の実存が賭けられているかのような哀調を伴いつつ繰り返されてきた。普遍への跳躍は、包括的な企てとして遂行され、これは近代化・資本主義化が国全体に衝撃を与えた課題であったからにほかならない。「宗教的思考様式の黄昏」の時代にあつて、国民国家は偶然性に翻弄される個人の人生に意味を保証する最後の砦であったから、雑種化した国民国家の痛々しい跳躍に個人の実存までもが賭けられているかのような錯覚が生じた*3)。跳躍はたしかに世界を驚かせたが、その絶頂とも言うべき「近代の超克」論、バブル期の日本経済論が示すように、普遍的価値に至る

*1) イロニーとは辞書的には「言おうとすることの反対のことを言うこと」(『岩波哲学思想辞典』)という意味。ドイツ・ロマン派の文脈では、「(神秘主義とは異なり)世界のなかにとどまりつつ一方、また他のより高いものへの憧憬を抱きながら、常に洗練された趣味への道を見出す」態度、「非合理的な態度を示しながらもなおかつ保っている合理主義の名残」(カール・シュミット)と定式化され、表面の言動と内意との捩じれに特質がある。

*2) 例えば竹内好である。中国の近代化が本格的に軌道に乗ったいま、ジョン・デューイに抛りつつ展開される竹内の日中近代化比較論は再読の価値があるだろう。

*3) このような言説の担い手となつたのは、三四郎のようなムラから出てきた男性の単身上京者であった。神島二郎は生産的基盤から遊離した上京者が、秩序感覚の不安とノスタルジーをもとに形成した「第二のムラ」(藩閥、学閥等)と日本ファシズムの関連を論じている(『近代日本の精神構造』(1961年))。本稿で言う言説の構造もまた、不安とノスタルジーに駆られた三四郎たちのものである。

表1 日本をめぐる言説構造(総括表)

言説の構造	「後進的で逸脱した畸形的『雑種』が」	「普遍へと跳躍する。」
経済・社会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「講座派」の日本資本主義理解 (野呂栄太郎、山田盛太郎) 明治維新はブルジョア革命として不徹底、封建制と資本主義の雑種 一点豪華主義的重工業化の脆弱性 (戦艦薩摩) ○ 「国家総動員法」(1938年)等による統制・総動員体制 (陸軍、新官僚・革新官僚、近衛新体制) ○ 「久しく後進性の現われとみなされてきた日本の特質」(村上泰亮) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ロシアにつづき、世界に先駆けた社会主義革命 ⇒ 弾圧による壊滅 ○ 重工業力、戦力の確保 (大東亜共栄圏の建設) ⇒ 敗戦 ○ 日本の経営、文明としてのイエ社会 ⇒ 経済バブルの発生と崩壊、理論的袋小路 (「開発主義」)
文化・思想	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本語の改造 (日本語の雑種の適応) 和製漢語等による学問言語日本語の構築 (西洋の学問の受容) (御雇外国人) ○ 言文一致運動を通じた近代日本文学の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本語による普遍的学問の確立 (理工学、哲学、法学、経済学) 『文学論』夏目金之助 (「F+F」の文学理論) ○ 近代文学の確立 『浮雲』(二葉亭)、『三四郎』(夏目漱石)、二度のノーベル賞 ⇒ 近代人の苦悩 (漱石)、「かのように」(鴎外) ○ 「近代の超克」 岡倉天心 (文化的貯蔵庫から、世界文化の高次の統一体へ) 西田幾多郎 (矛盾的自己同一を経由し、世界としての他の主体の包摂) 保田與重郎 「イロニーとしての日本」 ⇒ 敗戦、理論的・美学的袋小路
21世紀初頭	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本企業に蓄積された技術 (伝来の匠の技との雑種の一体化) ○ サブカルチャー (後進的日本大衆文化と、ディズニー・米国ポップカルチャーとの雑種) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 『新成長戦略』(2010年6月18日閣議決定) ○ クールジャパン

新たな言説構造の可能性?

もはや我々が近代そのもの ⇒ 先端技術に基づく財・サービスの世界への販売、技術による環境問題等の解決
⇒ ポップカルチャー愛好者間の交流・連帯、マルチチュード?

経路の論理的詰めが十分だったとは言い難い。カール・シュミットの述べるところ、即ち「ロマン主義的生産性は一切の causa の関連を意識的に拒否し、それとともにまた目に見える世界の現実の諸関連に干渉する活動をも拒否する。にもかかわらずこの生産性は…空想を生み出すこと、『文学化すること』によって絶対的に創造的であり得る」*4) に拠って判ずるに、従来の言説構造を支配してきたのは論理の力ではなく文学的想像力であって、我が国は1世紀半の長きにわたりロマン主義的心性のもとにあった、というのが筆者の考えである。

筆者が上海万博への関与を通じて得た、1) 日本の実存までもが賭けられているという感慨の由来はすでに明らかであろう。では、同時に観察した、2) 特殊性・畸型性といった暗く重たいものに付きまわられてきた雑種性が、軽くて明るい「ハイブリッド」とでも言うべきものに変容しているという感触は、いかにして生じたのか。以下、21世紀初頭における普遍への跳躍の企てである、先

端技術とポップカルチャーを取り上げるなかで、この第二の問題を解明していく。

(2) 『新成長戦略』と「技術立国」

政府は『新成長戦略』(2010年6月18日閣議決定)で、「強い経済」の実現に向けた戦略を提示している。施策は7つの柱のもと、21の国家戦略プロジェクトに分割されている(表2)。『新成長戦略』には様々な考えが盛り込まれているが、技術の開発・活用にひとつの重心が置かれているのは間違いない。具体的には、⑩「情報通信技術の利活用の促進」、⑪「研究開発投資の促進」は言うまでもないが、②「『環境未来都市』構想」では、スマートグリッド、再生可能エネルギー等の集中整備を想定し、④「医療の実用化促進のための医療機関の選定制度等」では、日本発の医薬品・医療機器の輸出・製品化等を目指している。また、⑥「パッケージ型インフラ海外展開」においても、高速鉄道、水等、我が国が技術的優位を有するとみられる分野の海外展開を支援していくこととしている。

*4) 『政治的ロマン主義』(1919、1925年)

表2 『新成長戦略』における国家戦略プロジェクト

環境・エネルギー
① 「固定価格買取制度」の導入等による再生可能エネルギー・急拡大
② 「環境未来都市」構想
③ 森林・林業再生プラン
健康(医療・介護)
④ 医療の実用化促進のための医療機関の選定制度等
⑤ 国際医療交流(外国人患者の受け入れ)
アジア
⑥ パッケージ型インフラ海外展開
⑦ 法人実効税率引き下げとアジア拠点化の推進等
⑧ グローバル人材の育成と高度人材の受入れ拡大
⑨ 知的財産・標準化戦略とクール・ジャパンの海外展開
⑩ アジア太平洋自由貿易圏(FTAAP)の構築を通じた経済連携戦略
観光立国・地域活性化
⑪ 「総合特区制度」の創設と徹底したオープンスカイの推進等
⑫ 「訪日外国人3,000万人プログラム」と「休暇取得の分散化」
⑬ 中古住宅・リフォーム市場の倍増等
⑭ 公共施設の民間開放と民間資金活用事業の推進
科学・技術・情報通信
⑮ 「リーディング大学院」構想等による国際競争力強化と人材育成
⑯ 情報通信技術の利活用の促進
⑰ 研究開発投資の充実
雇用・人材
⑱ 幼保一体化等
⑲ 「キャリア段位」制度とパーソナル・サポート制度の導入
⑳ 新しい公共
金融
㉑ 総合的な取引所(証券・金融・商品)の創設を推進

こうした技術重視の姿勢は、上海万博、特に日本館本体が打ち出していた、「技術立国」という国家的アイデンティティとも整合的である。後発国からパイオニアへの転換というバブル崩壊以来の宿題に答えると同時に、新興国からの追い上げへの対処という性格をあわせ持つものである。民藝運動の歴史、匠の技への賞賛の繰り返しが傍証するように、伝統・先端技術の雑種的一体化を達成した、スマートな技術者集団として世界史の普遍と繋がるという考えは、バブル崩壊後の国民的合意となった観がある。「技術立国」論において打ち出されているのは、もはやかつての日本的経営のような文化的裏付けを持った包括的なシステムではない。要素としての技術を売り込んでいくのであり、売り物である以上、文化的優越に基づく押しつけは問題とならない。地球環境問題の技術的解決など、世界史的普遍との結びつきを依然志向してはいるが、結びつきは有用な財・サービスの提供を通じて実現されるのである。

(3) ポップカルチャー

もう一方の例であるポップカルチャーではどうか。『新成長戦略』には技術の開発・活用とともに、クールジャパンの海外展開が盛り込まれている。日本のポップカルチャーの海外受容への率直な驚きからはじまった動きは、『新成長戦略』という政府最高の戦略の一端をなすまでになったのである。国による関与の狙いは、①コンテンツ・ビジネスの振興といった経済的実益、②我が国のソフトパワーの強化の二点に整理できる。ただ、クールジャパン現象が一般の関心を掻き立てるわけは、経済的な利害ではなく、ましてや外交力への関心でもない。むしろ素朴な認知欲求に関わるものであり、本稿の文脈からはこちらのほうが重要である。サブカルチャーという言葉が象徴しているように、米国のポップカルチャーの影響下生まれた雑種的存在で、一般の日本人の生活に密着していたものの、日蔭の存在に過ぎなかった文化的産物が、世界に通用することを突如として知らされた驚きと喜び——これが国内でのクールジャパン現象の平均的な姿であろう。まさに、雑種文化から世界的普遍への跳躍が、期せずして実現してしまったという受け止め方である。

日本のポップカルチャーが海外で受容された理由は種々論じられているが、ひとつ指摘すべき点は、ポップカルチャーからは日本の特殊性、臭みが脱落しているという点だと考える。ふたつほど例をあげる。海外での村上春樹の受容を巡って開催された国際シンポジウム『世界は村上春樹をどう読むか』(『文学界』2006年6月号)において、司会の四方田犬彦は次のように問題提起する。

それは村上春樹の持つ「文化的無臭性」ということです。…彼の作品の中に出てくるのはビーチボーイズであったりジャン＝リュック・ゴダールであったりスティーブン・キングであったり、つまり作品の中に日本以外の様々な文化的要素が大量に入り込んでおり、それが日本のものと対等に並んでいるように見える。…つまり、彼の「無臭性」が現代のグローバリズムにおいて、世界の人々に大きくアピールしたという事実があるわけです。(傍点引用者)

ここでは「無臭性」とともに「対等」という言葉にも注意したい。続いておこなわれた意見交換では、村上の歴史、特に日中関係史へのこだわりから、「無臭性・対等」論を疑問視する指摘も出た。しかし、村上の作品では、歴史は作品の素材として用いられている感が強く、作品のスタイルから受ける無臭性の印象を覆すほどのものではないと、筆者には感じられた。

もうひとつの例は、いわゆるオタクの世界に近いところから出た発言を引用すべきだろう。

「なぜ、日本のポピュラーカルチャーがここまでポピュラーになったのか」。理由はただひとつ。それは現実の差異を、自己から無関連化する機能があるからです。…当たり前のことですが、一定のコンテキストさえあれば、いわゆる日本的なサブカルチャーが、ドイツやアメリカやフランスや韓国などで次々と生み出されていくことが、今後あり得ると思います。(宮台真司「1992年以降の日本のサブカルチャー史における意味論の変遷」『日本的想像力の未来』(2010年) 所収)

ポップカルチャーが世界の大衆に向けた文化である以上、そこには最早日本はないのである。そうした目で世界をみれば、ポップカルチャーの愛好者間のトランス・ナショナルな連帯の可能性までもが展望される。無と化することで日本が逆説的に世界史の普遍と結びつく可能性を示唆する点で、「近代の超克」論との仄かな連続性が感じられるが、日本が無である度合いにおいて、京都学派はもちろん、「イロニーとしての日本」を掲げた保田與重郎よりも事態は進んでいるように見える。クールジャパン現象は、「普遍への跳躍」であるのか、「日本文化の消滅」であるのか紙一重の領域で進行しつつあるように見える。

(4) 新たな言説構造の可能性

言説の構造に生じつつあるこうした変容は、近代化・資本主義化が国全体に衝撃を与えた時代が過去のものとなりつつあることを、反映したものである。近代化・資本主義化の達成につれ、後発

国として経験する特有の歪みが薄まりつつある。雑種性が後進性・畸型性として解釈される傾向が後退し、伝統から先端まで様々なアイテムが、近代化した社会のなかで各々の立ち位置を安定的に確保する。上海万博への出展は、多様なアイテムを同一会場で対等に提示するという手法を取ったが、各アイテムが競い合うことはあっても矛盾・葛藤を生むことは最早ない。ビーチボーイズやゴダールが村上春樹の小説のなかで共存しているように、平坦なステージ上でひとつのまとまった日本(富山)の世界観を表現していたのである。

資本主義のさらなる深化、世界経済の競争条件の変動の影響を、日本が受けなくなるわけではない。グローバル化、世界勢力図の変動の予感極めて大きな課題であるが、これらの影響を日本は後発資本主義国として被るのではない。先進資本主義国の一角として受け止め、これら時代の課題への解答を見出していくのである。

もちろん、前世紀からの言説構造、ロマン派の想像力は依然として我々を捕らえている。ポップカルチャーの海外受容の基底に「文化的無臭性」があると指摘したところで、国内一般の受け止め方は、日本の文化的産物が認められた喜びというところにある。「無臭性」は無臭文化を創り出した自らへの誇りへと、逆説的に転化しうる。グローバル化の影響は日増しに強まっており、経済・社会、文化・思想の全面にわたって変革を迫られていることが、雑種性から普遍への哀感伴う跳躍という言説構造の再強化をもたらすシナリオも十分に考えられる。例えば、近年、英語を社内公用語とする事例が注目を集めている。ビジネス言語として日本語が足枷となって久しいが、学問においても日本語では一流の業績が上げられないという状況が理科系はおろか文科系にも広がって久しい。こうした状況は、日本語で思考し、文学する力を衰えさせていくだろうが、そうした見通しには筆者も複雑な感慨を抱かざるをえない*5)。我々の半身ははまだロマン主義者のものである。こうしたことから当面は、新旧の言説構造が対抗しつつ、時には紙一重で区別がつかなくなるほど輻輳していくシナリオの蓋然性が高い。

しかしながら、普遍への経路において論理的な

詰りが不十分な場合、理論的あるいは美学的袋小路が口をあけて待っている。また、近代の時計の針を巻き戻すような人口の急減、それに伴う財政・社会保障の問題、地球規模の環境問題など、旧い言説構造では適切に解釈できない課題が重みを増している。「近代の超克」座談会において、小林秀雄が次のように発言していた。

一流の作家といふ者は必ず彼の生きてゐた時代とか、社会とかの一般通念との戦いに勝つた人だ。…どういふ時代でも時代の一流の人物は皆なその時代を超克しようとする処に、生き甲斐を発見してゐる事は、確かな事と思へる。

(傍点引用者)

もはや我々が近代そのものであり、問題になるのは、我々自身が一流であるかどうかだけである。我々はようやく自分の生きていた時代の課題に正面から対峙し、自らを別のものに変えつつ時代を超克する、そうした「可能性」を秘めた時代を手にした。そう考えることはできないだろうか。もちろん「跳躍」が、今度我々をどこへ連れていくのかは、事前には計り難いことではある*6)。

【補論】リスボン地震と「最善説」

リスボン地震(1755年)が、ポルトガルの凋落を決定づけた災厄として取り上げられるのを目にするようになった。リスボン地震は啓蒙思想家に大きな影響を与えたが、とりわけヴォルテール(1694-1778年)にとっては、「最善説」への懐疑を方向付けた意味で重要である。「最善説」とは、神の在る世界では、起こりうる可能な世界すべてのなかで最善の世界(best of all possible worlds)が実現しているはずだと考える説であり、リスボン地震のような異常な惨禍は、明らかに最善説とは

矛盾した事態だと、彼は受け止めた。しかしながら、その後、ヨーロッパがポルトガルなしでも大いに発展し、世界的覇権を手に入れたのも事実である。無慈悲な歴史家や神学者なら、リスボン地震についても、「万事、物事は現にあるよりほかの仕方ではありえないということは、すでに証明されていることなのだ。なんとなれば、すべては何らかの目的のために作られているので、必然的に最善の目的のためにあるのだ」(パングロス：ヴォルテールによる作中人物)と言ってのけてしまうかもしれない。

東日本大震災は、日本が一流の近代国家であるか否かという問題を、極めて性急な形で問いつけているものである。ただ、我々が一流である証明を他所の誰かが与えてくれることはないし、我々が一流であることの証明に失敗したとしても、世界の大部分は「最善説」に傷がついたとは受け止めないかもしれない。

文中敬称略。資料提供に関し、富山県、P.A. WORKs 社に感謝する。本稿は筆者の現在または過去所属した団体の見解をあらわすものではなく、その責は筆者個人に帰する。

参考文献 本文中で言及できなかった基本的な文献を挙げる。

- ・B・アンダーソン『想像の共同体』(1983年)
- ・A・E・バーシェイ『近代日本の社会科学』(2007年)
- ・橋川文三『日本浪漫派批判序説』(1960年)
- ・水村美苗『日本語が亡びるとき』(2008年)

プロフィール

廣光 俊昭(ひろみつ としあき)

大臣官房総合政策課企画室長。92年大蔵省に入省後、国際局、銀行局、主計局等の本省部局のほか、英・オックスフォード大大学院、世界銀行(Senior Advisor)、富山県(知事政策局長)を経て、現職。

*5) 先述した村上春樹に関するシンポジウムで、英語翻訳者が、日本語では過去形と現在形を混ぜて使うが、翻訳の際には時制を統一せざるをえないと指摘している。席上での例に即すと、「真由美が最初に鎖骨を砕いた若い男は、スポイラーのついた白いニッサン・スカイラインに乗っていた。相手の名前は知らない。」(『スバナ』)の第二文は「She didn't know his name.」と過去形で訳されてしまい、日本語の現在形にあるとぼけた感じの生きのよさは失われてしまう。日本語の衰退はいずれ、現在形の生きのよさへのこだわりを偏屈な拘泥とみなすであろう、世代の台頭を招くことになるのではないか。

*6) 「語について我々が行なう新しい状況での適用は、全て、正当化とか根拠があつての事ではなく、暗闇の中における跳躍なのである。」(Saul. A. Kripke)

COLUMN

アニメ『true tears』にみるハイブリッドな表現の現在

本文では富山県内の制作会社P.A.WORKSの手になる、テレビアニメ『true tears』に言及した。本作は2008年1月から3月まで放映されたもので、当初県内での放映はなく、全国での評判を逆輸入する形で後追的に県内で放映された。県外からの評価を通じ、地元での認知が高まるという構図は、海外での評判を契機に日本国内でのポップカルチャーへの認知が高まったという経緯と相似形である。

絵本作家を志す主人公の男子高校生が、ふたりの女子生徒の間を揺れ動く。これが物語の骨格である。ヒロインのひとりには主人公の家に引き取られているクラスメート、もうひとは別のクラスの子である。最終的にひとりを選択する過程が、主人公、ヒロインふたりの成長と重ねあわされている。ラブコメ(本作品のルーツを意識すればパソコンゲーム(RPG))の物語構造を踏襲したものであるが、選択されない方のヒロインの独特の存在感、複数の(疑似)兄妹関係から生まれる物語の立体感が相まって、楽しめる(泣かせる)作品に仕上がっている。

ただ、本作を特に魅力あるものにしてているのは、ラブコメと富山県のある地域の文化環境とのハイブリッドな組み合わせにある。主人公とヒロインとの同居関係というシチュエーションが、富山の田舎の古い家という舞台のなかで生きてくる。造り酒屋であるその家は、地元社会の求心力の中心のひとつであり、

主人公の広い世界へと飛び立つベクトルと緊張をはらみつつ、物語全体に安定感を与えている。古い町でラブコメが展開されることで、一種の異化効果もたらされるが、より印象深いのは、多種多様な文化アイテムをばらばらの感じを与えることなく、アニメの平坦な画像上に対等に並べていく手際の確かさである。町が古いだけでなく、近くに米国風モールのある都会があることや、準主役級の女性キャラクターが今川焼屋などという、古いのか新しいのか曖昧な場所で店をやっているのもいい。こうして並べられたものが、全体としてひとつの世界像を提示することに成功している。

作品の舞台は、富山県旧城端町(現南砺市)をモデルにしている。城端は県内でも古い文化を残している地域で、その割に生活水準は高く、高岡・金沢という都市との距離も近い。多様なアイテムが共振するハイブリッドな画面のなかで物語が動き出すことで、逆説的に全国の視聴者は物語にリアリティを感じることができたのではないかと。日本の漫画・アニメが海外の視聴者にとって魅力的な存在に映ることも、同じことがいえるのではないかと。海外の視聴者は、

ハイブリッドで、もはや日本を意識させることをやめた作品が、逆説的に画面に立ちあげてくる世界観のまとめ、こうしたところに惹かれているのではないかと。そんなことを考えさせる作品である。



© true tears 制作委員会

城端観光ポスター
© true tears 制作委員会

© true tears 制作委員会



© true tears 制作委員会